

月刊

2019

12  
月号

# みんぱく



特集



## 先住民の言語

国際「先住民」言語」年と消滅の危機に瀕した言語と 吉岡乾

グアテマラのマヤ諸語 八杉佳穂

オーストラリアのワロゴ語 角田太作

日常空間にアイヌ語を 北原モコットウナシ

道路標識から読み解く先住民族の思い 庄司博史

# 2CVも民芸のうち？

たにかわ しゅんたろう  
谷川 俊太郎

プロフィール  
1931年東京都生まれ。詩人。1952年  
第一詩集『二十億光年の孤独』（創元社）を  
刊行。1975年『マザー・グースのうち』（章  
思社）で日本翻訳文化賞、1992年『日々  
の地図』（集英社）で読売文学賞、1993  
年『世間知ラズ』（新潮社）で萩原朔太郎賞  
2010年『トロンコロジー』（新潮社）  
で鮎川信夫賞など受賞・著書多数。

私はどちらかというと美術館で見るアートよりも、巷で手に入れやすく、身近に置けるクラフトの方が好きだ。幼い頃から父母に連れられて駒場の民藝館に行っていたし、自動車やラジオなどの機械類の、中身や理論ではなく外側の形態に興味を持つ少年だったから、当時言われていた工業デザインという分野に、自分の将来を見るところに叶わぬ夢を抱いたりもしていた。

詩を書き始めてからも、私はボードレールやイエーツを読むよりも、「マザー・グース」のような伝承わらべうたを、日本語に移すことの方に、詩の世界での手応えを感じていた。無名の作者の手になる日用品や、歌謡の中に、自分の求める美を見つけるのが楽しかった。

複製でしか知らなかったフェルメールを見にオランダへ行つて、本物の持つプレゼンスに深く心を動かされた時、私が旅の記念に買って帰ったのは、子どもの立小便を描いた古いデルフトスタイルの一枚だった。同時に私はまた空港の売店でフィリップスの車載カセットデッキも買いこんでいた。機能とともにその無駄のないデザインが好きだったから、自分で当時乗っていた（ヘカーリーナ）に組みこんで、パロック音楽など聴いていた。

民俗の（学）には疎いが、私は常民が生み出

す広義のアートには若い頃から魅力を感じていた。自動車やラジオにしても設計のコンセプトと切り離せないパッケージに独特の美を感じていたのだ。技術上の新しい古いは絵画や彫刻と同じく私にとつてはあまり問題ではなかった。車にもラジオにもヴィンテージと称される時代もあるのだ。

私の父は哲学を学んだ人だったが、学問よりも気に入った骨董を蒐集する方に熱心だったように思う。一九七五年に出版された『骨董夜話』という本に、白州正子らと並んで父もいくつかの愛蔵品を披露しているが、それが例えば紀元前に作られたエトルリアの鏡であっても、まだアーティストという存在が自覚されなかった時代の民芸と呼んでもおかしくないと思ふ。商う店が増えて民芸という言葉に独特の臭みを感じられるようになってしまったのを、私は残念に思っている。

古いものを見る父の眼を私は信頼していたが、外出時には必ず三つ揃いを着ていた父は、ジーパン・Tシャツの私に困惑していた。だがその父が私の初恋の車、まるでブリキ細工のようなシトロエン2CVを気に入ってくれたのは意外だった。用途は異なっている、時代が離れていても、世間の評価に惑わされず、美しいものは美しいと感じるのは父の血かと思つた。

## 月刊 みんなぱく

12月号日次

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>2CV も民芸のうち？<br/>谷川 俊太郎</p> <p>2 特集 先住民の言語<br/>国際「『先住民』言語」年と<br/>消滅の危機に瀕した言語と<br/>吉岡 乾</p> <p>4 グアテマラのマヤ諸語<br/>八杉 佳穂</p> <p>5 オーストラリアのワロゴ語<br/>——宝石のような言語<br/>角田 太作</p> <p>7 日常空間にアイヌ語を<br/>北原 モコツウナン</p> <p>8 道路標識から読み解く先住民の思い<br/>庄司 博史</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/>村人と一緒に演奏する<br/>寺田 吉孝</p> | <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相<br/>マネキンとマンドラゴラ<br/>——人形の不気味<br/>山中 由里子</p> <p>16 みんなぱく回遊<br/>ワヤン人形の目<br/>福岡 正太</p> <p>18 シネ倶楽部 M<br/>日本とミャンマーのはざままで<br/>——「僕の帰る場所」<br/>横山 廣子</p> <p>20 ことばの迷い道<br/>寂しさいろいろ、惜しさいろいろ<br/>韓 必南</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

# 国際「先住民」言語一年と消滅の危機に瀕した言語と

吉岡 乾  
よしかわ けん  
民博人類基礎理論研究部

## 特集 先住民の言語

国連が定めた2019年「国際先住民言語年」にちなんで、本特集では先住民と彼らの言語がおかれている実情や再生・存続に関する取り組みなどを紹介する。世界各地の事例をとおして、先住民言語、ひいてはその話者の文化や世界観を守ることの大切さを伝えていく。



ブルシャスキー語を話すドマ人の子どもたち (フンザ谷, 2009年)

ご存知のかたは少ないかもしれないが、二〇一九年は、国連が「国際先住民言語年 (International Year of Indigenous Languages)」と定めた年だった。まず早めに述べておきたいのだが、「先住民 (Indigenous peoples)」という用語はふわふわわわして、つかみどころがない。「先住の (Indigenous)」という形容詞は辞書的に、「土着の (native)」「原住民の (aboriginal)」とほぼ同義であるといえ、「先住民」はすなわち「原住民」といっても構わなさそうである。かつての日本語では「原住民」というと、植民地主義とも相俟って、侮蔑的なニュアンスが伴っていたこともある。けれども、そんな時代は過去であり、今ではどの切り口に重きを置かにより、地域・研究者などの別によって、似た概念をさまざまな用語でいいあらわしている現状がある。本特集では、表題こそ国連広報の訳語に合わせたが、各論については各研究者の意図を優先し、その点についての用語の統一はしない方針を貫くこととした。

### 国際先住民言語年

この国際年の目的は、先住民言語の直面している致命的危機に世界中で注目をし、言語保存や復興、更には先住民の生活水準向上などとおして言語・文化の重要性を再確認することなどだとの

に、個々人の思い入れなどを盛り込みつつ、各言語の実情などを紹介してもらおう。

### 先住民言語と危機言語

と言いつつ、筆者はひねくれ者なので、あたかもすべての「先住民言語」なるものが危機言語であるかのような語り口にも、取り沙汰すべきは危機言語全般ではなく「先住民言語」のみであるといった建前にも、疑問を差し挟みたい。

ブルシャスキー語 (ブルシヨ人の民族語・話者一〇万人、ドマーク語 (ドマ人の民族語・話者五〇〇人)、カラーシャ語 (カラーシャ人の民族語・話者五〇〇人)、これらが筆者の調査しているパキスタンの言語のうちの、ユネスコに指名された危機言語である。レベル0「安全 (safe)」からレベル5「消滅 (extinct)」までの危険度評価のなかで、ブルシャスキー語はレベル1「脆弱 (vulnerable)」、ドマーク語とカラーシャ語はレベル3「ひどく危機的 (severely endangered)」とされている。いずれの言語も無文字言語であって、読み書きには学校で習う国語の

こと。活動の主導はユネスコに委ねられている。

国連が対象として想定している「先住民言語」は、「危機言語」と言い換えても、何も変わらなように見える。確かに、「先住民」の民族語は、世界中で消滅の危機に瀕しがちである。本当は潑刺な先住民言語もあるだろうが、国際先住民言語年の理念も、常に「先住民の言語が危機的だから保護・再活性化を」と言い張っている。であれば、国際危機言語年とすれば良かったの



上: ブルシャスキー語地名をウルドゥー文字とラテン文字で書いた看板 (フンザ谷, 2015年)  
左: ブルシャスキー語・英語交じりの「CHAP SHOP (肉屋)」という看板 (フンザ谷, 2019年)

ウルドゥー語が第二に用いられる。

けれども、話者人口こそ桁違いではあるが、ブルシャスキー語もカラーシャ語も、まだまだ子どもたちが習得しており、それだけでもユネスコの基準であれば「安全」扱いにされなければおかしい。どうして上で述べたような判定がされているのか、不思議でならない。一方でドマーク語は、三つの集落を除いて消滅しており、それらの集落内でもすでに高年齢以上しか用いられず、また老年層でも話さない者もあるので、危機的だといえよう。

それとは別の視点を持ち込んでみると、ブルシヨ人とカラーシャ人は、それぞれの谷では最古参と思われている民族であり、「先住民」であるといえる。だが、ブルシヨ人の隣人でもあるドマ人は、明らかにブルシヨ人よりも後の時代に南から移住して来た者たちであり、少なくともその二者の対比でいうならば、「先住民」だとはいえない。

そんななか、判定の怪しい危機言語だけを保護するのは良いのだろうか。先住民の言語文化だけに光を当てて活動するのはどうなのだろうか。

日本人は全般的に、学校教育のせい、生活環境のせい、民族・言語といった問題を意識するのが苦手なように見える。特に、中央に行けば行くほど、それらを別世界のものとして関心から外してしまっていないか。もう国際先住民言語年も終焉を迎えるが、それで問題が消滅するわけではないのだから、本特集をきっかけのひとつに、少しでも興味を湧かせてくれたら幸いに思う。

ではないだろうか。

ユネスコは危機言語を名指しで示して、警鐘を鳴らす。最近では二〇〇九年に大々的に報じられた。曰く、危機言語は二五〇〇言語以上だと、世界の言語の半数だとか。どう算出したのかは知らないが、なるほど、そんなにも危機言語が多いなら、言語多様性も大いなる危機に直面しているといえる。世界規模の言語危機だ。実感として危機言語の危機の加速具合や、そういった小さな言語の研究者の圧倒的不足を覚えている昨今なので、危機言語年だか先住民言語年だかで取り組むのも、当然良い。

そこで本特集では、実際に危機に瀕している、もしくは瀕していた「先住民言語」の専門家たち

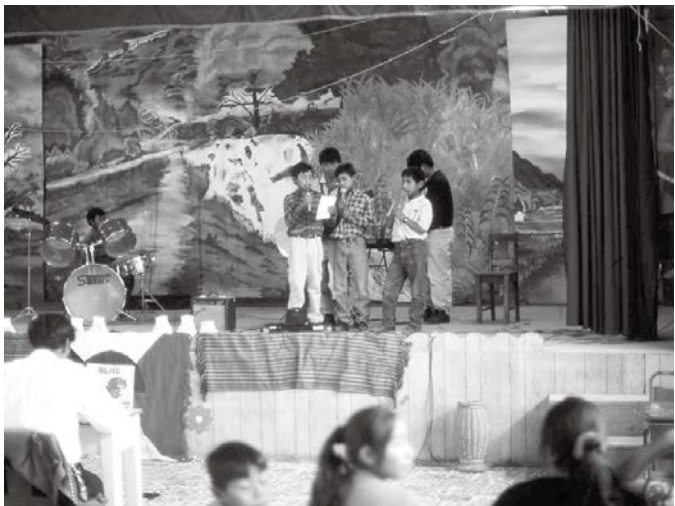


上: 学校は、低学年はウルドゥー語で、その後は英語で教わる (フンザ谷, 2017年)  
下: 老いも若きもカラーシャ語 (レンプール谷, 2008年)

全 (safe)」からレベル5「消滅 (extinct)」までの危険度評価のなかで、ブルシャスキー語はレベル1「脆弱 (vulnerable)」、ドマーク語とカラーシャ語はレベル3「ひどく危機的 (severely endangered)」とされている。いずれの言語も無文字言語であって、読み書きには学校で習う国語の

中南米のほとんどの国では公用語はスペイン語であり、スペイン語ができなければ、政治、経済的ばかりでなく、医療や文化、教育など、あらゆる面において不利を被る。そのため、先住民言語は、いまだにたくさん話されているものの、たえず衰退、絶滅の危機にさらされている。

公用語の支配力の強さを思い知ったのはベリーズを訪ねたときであった。現在三〇認められているマヤ諸語のうち二〇がグアテマラにあるが、そのうちのひとつモパン語は、グアテマラとベリー



マヤ諸語のひとつアワカテコ語を再活性化するための弁論大会(アグアカタン、2001年)

ズの二国に分断されている。グアテマラ側のモパン人の多くは、母語のモパン語に加えスペイン語を話す。ところがベリーズのモパン人は英語を話す。マヤの人びとは第二言語としてスペイン語を話すのが当たり前だと思込んでいたので、公用語の政治的力に衝撃をうけてしまったのである。

### 母語の活況

わたしはじめてマヤ人に会ったのは一九七五年である。その当時グアテマラでは、彼らの言語は「方言」として蔑視され、学校で母語を話すと罰せられ、スペイン語を使うよう強制されるのがふつうであった。まだスペイン語を話すことができるマヤの人は少なかった。

そんな状況が、一九八〇年代に入ると先住民運動が盛んになり、変わり始めた。そして「グアテマラのマヤ言語アカデミー(ALMG)」という統一組織が一九九〇年になって公認された。

その後は国の予算や諸外国からの援助が増え、それぞれの言語の文法書や辞書などが続々と出版されるようになった。もちろんそれは欧米の言語学者の協力に加え、「世界の先住民の国際年」(一九九三年)があったからできたのだが、一九七〇年ごろから増え始めた欧米の研究者の成果がマヤの人びとに還元されることが進み、基礎ができていたことも大きい。各言語の中心地にALMGの支部が置かれ、母語を研究する言語学者が輩出し、



弁論大会の発表前に指導を受けるアワカテコの少女(アグアカタン、2001年)

言語学で「飯が食える」ようになっていった。彼らの活動によって、母語の大切さが広く認められるようになるとともに、スペイン語ができる人も急速に増えていった。

### 理想と現実

ところが二一世紀に入り、資金や援助が少なくなるにつれ、言語学で食えなくなり、あれだけ活発であった運動も下火になってきている。グアテマラの現状をみると、学校での二言語教



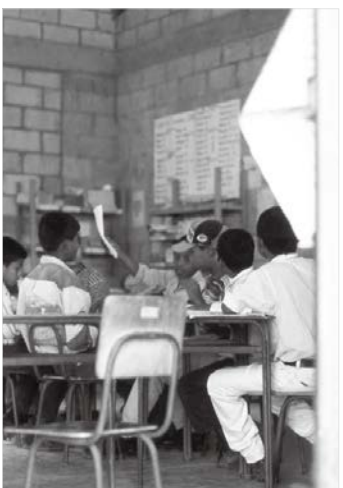
ポコマム語の主要都市サン・ルイス・ヒロテペケの小学校の看板(2001年)



サン・ルイス・ヒロテペケの小学校のポコマムの少女(2001年)

育の試みや文化再活性化の運動により、先住民言語や文化の大切さが知れ渡ったように思われる。しかし携帯電話の普及やインターネットの発達などで、社会が急速に変わり、スペイン語の優越性は以前にも増して強まっている。グアテマラにはたくさん人の言語があり、互に通じ合わないので、共通語としてスペイン語を使わざるを得ないこともある。だから二言語併用が理想ではあるが、スペイン語の圧倒的力のもとで、先住民言語を話す人は減り続けている。

厳しい言い方になるが、母語を話しても社会的な便益は何もない。しかし母語は民族の誇りであ



マヤ諸語のひとつチオルティ語を母語とする子が通う学校(ホコタン、2001年)

る。言語の多様性は人類の宝である。スペイン語が支配的な社会で、どこまで母語をまもることができるか、彼らの意識と情熱にかかっている。

## オーストラリアのワロゴ語 ——宝石のような言語

角田 大作 国立国語研究所 名誉教授

### 現地調査

わたしは一九七一年三月にメルボルンのモナッシュ大学の大学院修士課程に入学した。同年から一九七四年にかけて三回、大陸東北部でいくつかの言語を調査した。調査の中心はワロゴ(Warrong)語である。タウンズビル市の西北、ケアンズ市の西南の言語である。おもに、最後の話者、故アルフ・パーマー(Alf Palmer)さんから記録した。この地域の言語は既に消滅寸前であった。しかし、パーマーさんは例外で、ワロゴ語を流暢に話した。

### 最後の話者のことば

わたしはワロゴ語の調査を始めたときは、ただデータを得て、修士論文を書いて、修士号をもらえばよいと思っていた。しかし、パーマーさんは繰り返しわたしに言った。「ワロゴ語を話せるのはわたしが最後だ。わたしが死んだら、この言語は死んでしまう。わたしが知っていることはすべて教える。だからきちんと書いてくれよ」。

今にして思うと、パーマーさんは「何のために学問をするのだ? わたしの言語を調べて、成果を

挙げて、立身出世する。それだけで良いのか? データ泥棒でよいのか?」と言おうとしたのである。言語の価値、消滅危機言語を記録することの大事さ、研究者の倫理・役割を教えてくれたのである。

### 再活性化運動の開始

一九八一年にパーマーさんが亡くなり、ワロゴ語は消滅した。約二〇年後に現地から依頼があり、わたしは二〇〇〇年にワロゴ語の再活性化運動に

参加した。この運動の中心人物はパーマーさんの孫レイチェル・カミンズさんである。

### 世界でも稀な現象

ワロゴ語には統語的能格性と呼ぶ現象がある。複文の作り方のひとつである。ワロゴ語の再活性化運動の打ち合わせの際に、ワロゴの人たちに以下のことを話した。

「ワロゴ語には統語的能格性とよぶ現象がある。これは世界でも稀な現象で、宝石のようなものだ。おもに、豪州東北部のこの地域の、ワロゴ語など、

七つの言語に集中している。従って、この地域は宝庫のようなものだ。統語的能格性はこの地域の人たちだけでなく、人類全体にとつて、貴重な文化財だ。」

ワロゴの人たちは「何だろう。知りたい」と強い興味を示した。原住オーストラリア人(Aboriginal Australians)は英国による植民地化が始まって以来一〇〇年以上、虐げられ、差別されて来た。オーストラリアでは原住オーストラリア人の言語は単純な言語であるという偏見が強いようだ。ワロゴの人たちは統語的能格性の話を聞いて、自分たちの言語に一層強い誇りを感じたと思う。



ワロゴの人たちと筆者。前列左はレイチェル・カミンズさん(クィーンズランド州、タウンズビル市、2011年、角田三枝撮影)



筆者が教材の説明をしている(クィーンズランド州、パーム島、2011年、角田三枝撮影)

「ワロゴ語では統語的能格性とよぶ現象がある。これは世界でも稀な現象で、宝石のようなものだ。おもに、豪州東北部のこの地域の、ワロゴ語など、



上：アルフ・パーマーさん(クィーンズランド州、パーム島、1972年)  
左：アルフ・パーマーさん(右)と筆者(クィーンズランド州、パーム島、1974年、撮影者不明)



### 再活性化運動の内容

わたしは二〇〇二年にワロゴの人たちのためにワロゴ語のレッス

ンを始めた。今までに、発音、基礎語彙、活用(名詞、代名詞、動詞)、単文(自動詞文、他動詞文、平叙文、疑問文、命令文)、複文(統語的能格性)、ミニ会話、親族体系、神話、名付けなどを教えた。言語学者の角田三枝博士が、レッスンのおこない方、教材の準備など、様々な面で協力してくれた。

### 終わりに

アルフ・パーマーさんは、ワロゴ語の記録が残るよう、全力で教えてくれた。わたしはできる限りご恩返しをしたいと思っている。

## 日常空間にアイヌ語を

北原モコツトウナン 北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授

### アイヌ語の「話し手」

高橋志保子(シホロ)さんは旧アイヌ民族博物館(北海道白老町)のベテラン職員で、同館を訪れた人の中には力みなぎる歌声とホロロセ(舌先を震わせる「ホロロロ」という声)を聞いたことのある人も多いだろう。同館では、公開内容としてだけでなく、簡略ながらも職員同士の意思疎通にアイヌ語が使われてきたという。例えば、来館者があった場合には、気づいた職員が「タアンペンモ」といったのだとか。直訳すれば「この人はそうではない」だが、言わんとして「健康者ではない」ということ。障がいについてこと



高橋志保子(シホロ)さん。ポロト湖畔にて(2019年、山道ヒビキ撮影)

さらに周囲の耳目をそばだてないようアイヌ語で伝え、通常の解説よりゆっくり話し、身振りを細かにするなどの対応をしたのだという。泥酔者が来たら「タアンペイヨスケ(この人は酔っている)」と警告して、若い女性職員を隠れさせたそう。こういう実践の蓄積があちこちにあることに、アイヌ語の底力を感じる。ただ、当人たちは「話し手」を自認していないことも。だから「アイヌ語を聞かせてください!」と正面切って乗り込むと恐縮してしまう。時間をかけ、リラクセスして話をうかがう雰囲気づくりが大切だ。こうした、アイヌ語の現状について、どう表現すれば正確だろう。楽観はできない。特に二〇〇〇年代に、指導的な話し手が次々亡くなった衝撃は大きかった。「今でもどこかには何でもスラスラ話せる古老がいる」というイメージがあるとするは、そういうことは期待できそうにない、というのが関係者の実感ではなからうかもちろんそうした話し手をわたしたちが知らないだけかもしれないが、研究・教育に協力することは事実上難しいだろうからわたしたちは与えられた環境で



地下鉄さっぽろ駅に設置されたモニターに映るアイヌ語天気予報(2019年)

何とかするしかない。今の暮らしに生きているアイヌ語を大切にするとともに、研究・教育の充実が急務である。近年、旧アイヌ民族博物館、北海道博物館、国立国語研究所などが音声とテキストのデータベース化と公開を進めてきた。これらの

役割は今後ますます高まるだろう。

### もつと身近に

嬉しいことに、学習者にも並々ならぬ意欲をもった人が増えている。口承文芸を暗唱し、語りに磨きをかける人やまったく新しい音楽に取り組む人。年一回のアイヌ語論大会はほとんどハイレベルになり、特に子ども部の目は見張るものがある。音声・テキストを公開すると、翌年にはそれを語る人が出てくるから、成果が目に見える思いがする。二〇一八年大会は例年に増して熱かつ

た。小学二年生が大人さながらの技巧で子守歌を演じたかと思えば、バンドを組んでのオリジナル曲や、ヒップホップが披露される場面もあった。バスや地下鉄など、公共空間でアイヌ語を流す取り組みも進みつつある。まとまった表現ばかりではない。家族との会話やメールに、ひとことアイヌ語を挟むことに喜びを感じる人が増えている。その意味でアイヌ語はちよつとした活況を迎えている。これがどこまで盛り上がるか。それは、研究の充実と、誰かに遠慮せず、気楽に気長にアイヌ語を使っていく雰囲気醸成にかかっているのではないか。



中学生のバンド「GREEN Bou GRINBO」。アイヌ語のオリジナル曲を弁論大会で披露した(2018年、辺泥敏弘撮影)

## 道路標識から読み解く先住民族の思い

庄司 博史 民博名誉教授

近年ようやく日本でもサーミ人はこの自称民族名でよばれるようになったが、三〇年あまり前、まだラップ人と呼ばれたトナカイ遊牧民という牧歌的イメージで語られていたころ、彼らはノルウェー、スウェーデン、フィンランドを相手に民族としての存在を主張して多様な活動を続けていた。その成果として今日彼らはEU圏唯一の先住民族として、経済活動への一定の排他的権利や伝統的居住地域における文化的自治権を獲得している。

### 言語的復権を求めて

文化自治のなかで、彼らのいちばんの関心の対

象となってきたのは民族語サーミ語で、ノルウェー語やフィンランド語と同等の書きことばの機能と権威の承認を目指してきた。一九七〇年代以降、彼らの言語運動はめざましく、また各国家には以前の抑圧的な同化政策への反省もあって、着々と成果をおさめてきた。

特に一九九二年ノルウェーとフィンランドで制定されたサーミ言語法を契機に、サーミ語は北歐三国でサーミ伝統的居住地域とされる自治体では地域公用語として扱われ、例えば役所の窓口ではサーミ人はサーミ語での口頭の対応、あるいは通訳を要求できるようになった。また基本的にサーミ



カラシヨクの国道では地名は二言語表記。上がサーミ語で下がノルウェー語(フィンマルク県、2019年)

ミ語を用いての育児や教育は就学以前から高等教育までうけられる制度が整い、教材や遠隔授業のシステムも充実しつつある。各国の国営放送は常設のサーミ語ラジオ局をもつほか、毎日夕方には全国チャンネルでテレビニュース「オツザサト」を流しており、サーミ語の存在感にもたらす影響は計り知れない。

### 道路標識をサーミ語で

民族全体で約六万人、話者はせいぜい四万人ともいわれる先住民族言語サーミ語がこれだけの地位を獲得したのは、一種のモデルケースともみなされる所以だが、さらに彼らの重視するのがサーミ語地名の回復とその顕在化である。

具体的には公的看板や道路標識の地名、街路名

をサーミ語ですすむということだが、サーミ大学の地名専門家ヘラント教授は、ノルウェーでは一九世紀から同化政策として地名のノルウェー語化が進められたことを明らかにしている。他の二国でも三、四〇年前までは道路標識も公的施設の名称も国家語のみが一般的で、サーミ人たちのよび方とは異なっていた。ノルウェー語のカラシヨクはカーラシヨホカ、フィンランド語のイナリはアナールとよばれる。先に触れたサーミ言語法で彼らの主張が明記されて以降、サーミ地域では地名標識の書き換えが進み、今では北欧諸語には存在しないÅ, Ć, šなどの文字を含むサーミ語地名や街路名を見かけることが多くなった。



イナリの道路標識。右2つの地名は上がフィンランド語で下がサーミ語。左は施設「サーミ教育センター」の表示。フィンランド語に続き、イナリの3つのサーミ公用語の表記が続く(2019年)

とはいえ、問題がないわけではない。国家と自治体のあいだで

サーミ語表記への熱意が異なったり、サーミ語のみを許す自治体もあれば、両言語表記を求める自治体もある。また、一般に国道では国家語を上、サーミ語を下に表記することにはなっているが、自治体によってはそれに従わないケースも見られる。国境をこえた瞬間、原則が変わることも見られ、外部者にはどちらが何語なのか不明な場合がめずらしくない。とはいえもつと深刻なのは、サーミ人口の都会への流出や主流言語への同化の問題で、サーミ語話者の維持が困難になりつつあることだ。サーミ語話者が消え、サーミ語表記のみ残ることにもなりかねない。



隣接するフィンランド・カリガスニエミ(左)とノルウェー・カラシヨク(右)の街路名。前者ではサーミ語(上)とフィンランド語の二言語表記、後者では単独でサーミ語が表示されている(2019年)

## 村人と一緒に演奏する

てらだ よしたか  
寺田 吉孝

民博 学術資源研究開発センター



村で演奏させてもらいました  
古老たちと演奏する筆者（中央）（プトアン市、2002年）

独特の音の体系をもつフィリピン南部の音楽。その美しい音楽の世界が紛争に巻き込まれ、存在を危うくしている。ゴングの演奏をとおして関心をもち、研究を続けてきた筆者が音楽の未来に願うものとは……。

わたしがまだ学部生だったころ、クリンタンとよばれるゴングと太鼓で奏でる音楽を習った。フィリピン南部に住むイスラム教徒により伝承されてきたこの音楽を、フィリピンではなく、フィリピンからアメリカ合衆国に移住した二人の演奏家から教わった。クリンタンはそれまでわたしが慣れ親しんでいたこの音楽ジャンルとも異なっており、未知の領域に踏み込む興奮も手伝って、一生懸命練習したのを覚えている。当時はフィリピンに対して特別な思いがあったわけではなく、音色や音の組み立て方など音楽上の関心からのめり込んでいった。

一九九〇年代はじめには、師匠たちが結成した演奏グループに誘われてメンバーとして活動することになった。グループは国の助成金などを得て、北米各地で公演活動をしていたので、ロサンゼルスにあるハリウッドボウルのような巨大会場から、メイン州にある田舎町の小さな教会のチャペルまで、さまざまな場所でさまざまな聴衆に向けて演奏した。

### 村での演奏

グループでの活動にも慣れてきた一九九三年、師匠の一人に付き添って初めてフィリピンを訪れた。現地では、わたしは彼の弟子として紹介されるので、どこに行っても演奏することを求められる。村人たちの生き生きとした演奏のあとで、わたしが出て行くのは勇気があるのだが、素晴らしい演奏者たちと共演できるのは夢のような機会でもある。しかし、初めてそのような機会が与えられたとき、「ある程度できる」と思っていたそれまでの自信は吹っ飛んだ。村人たちの熱い視線もさることながら、彼らの創り出す音が圧倒的な存在感をもっていたからだ。クリンタンは打楽器のアンサンブルなので、元来大きな音が出るのだが、彼らの打ち方は強烈で、自分が演奏しているはずの音がよく聞こえない。舞台上でマイクを使う比較的ソフトな演奏法に慣れていたので、頭のなかで真っ白になった。

異なるのは音の大きさだけではない。村で演奏していると、共演者の

フィリピン  
ミンダナオ島



古老たちが醸し出すゆったりとしたグルーブ感は格別  
(ダトゥ・ピアン、1993年)

打ち出す音が別々ではなく、ひとつの大きな塊となって全体を包み込む。このような音の洪水に見舞われると、自分という境界がぼやけてくる。自分の意志で楽器を打っているのに、制御している感覚がない。音の渦に溺れて間違っただけではないと感じる自分がいる一方で、誰かが自分の腕を動かしているような不思議な安心感もある。言いあらわすのは難しいのだが、これは一種のトランス状態なのだろうか。この経験の境に、音楽をパートごとに分析することの限界を強く意識するようになり、その後の音楽のとらえ方に大きく影響したように思う。

### 音の洪水の行方

この音楽が演奏されてきたミンダナオ島西部は、今でも政情が極めて不安定だ。一九七〇年代よりイスラム分離主義集団と政府軍とのあいだで断続的に戦闘が続いてきた。二〇一七年五月にはイスラム国の支援を受ける武装集団マウテが蜂起し、ムスリムの中心都市のひとつであるマラウイ市を占拠したことは日本でも大きく報道された。政府軍が空爆をおこない、マラウイは戦場と化した。民博はこの街で二〇〇八年に映像



クリンタンの演奏がおこなわれたこの建物は、2017年の空爆で破壊された（マラウイ市、2008年）

取材をおこなったが、音楽演奏を記録した建物も爆撃で破壊された。このような状況のなか、多くの村人たちが難民となつて離散し、音楽演奏の母体となつているコミュニティが数多く壊された。特に子どもたちがクリンタンの演奏を聴きながら育つ環境が徐々に失われてきたことは、この音楽の伝承にとつ

て大きな痛手である。もう一人のわたしの師匠は、このような状況に心を痛め、若者たちに向けてネットで情報発信をしている。村でわたしが演奏する姿をネット上で公開するのも、クリンタンが時代遅れな音楽ではなく、外部者も興味を示す普遍的な価値をもつことを伝えるための戦略である。自分の拙い演奏がネット上で流れ続けるのは気が重いのだが、もし師匠が願うような効果が少しでも生まれるのなら喜んでその役を引き受けよう。あの圧倒的な音の洪水のなかに存在できる至福が、ずっと受け継がれていくことを祈って。



ネット上で公開されている映像のひとつ。ここでは筆者（右）の演奏に合わせて村人（中央）が踊ってくれた（ダトゥ・ピアン、1993年）

企画展

「アルテ・ポプラー」  
——メキシコの造形表現のいま——

メキシコでは、職人や一般の人びとによる素朴でもしうい造形表現をアルテ・ポプラーと呼びます。先住民の仮面と毛糸絵、地域色豊かな陶器、都市の街路にあふれる骸骨人形や、生命の木といわれる焼き物のオブジェなど、現代のアルテ・ポプラーの姿を紹介いたします。

会期 12月24日(火)まで  
会場 本館企画展示場



生命の木

■関連イベント  
ギャラリートーク  
日時 12月5日(木) 14時  
場所 本館企画展示場  
講師 鈴木紀本館教授  
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

「朝枝利男の見たガラバコス」  
——1930年代の博物学調査と展示——  
アメリカの学芸員で写真家の朝枝利男が1930年代に撮影したガラバゴスの風景について、彼の描いた美しい魚の水彩画とともに紹介いたします。



ガラバコスでパイプをふかす朝枝利男

「あまねき旋律」しらべ」  
インド北東部ナガランド州のチャケサン・ナガの人びとの歌を集めたドキュメンタリー映画。季節が移り変わる中、山々に広がる棚田で農作業をしながら、日々生活や感情を歌に紡ぎながら生きていく人びとを追う映像をおして、人間にとって歌とは何かを考えます。

日時 12月22日(日) 13時30分～16時  
(開場13時)  
会場 特別展示館  
寺田吉孝本館教授  
解説 岡田恵美(琉球大学准教授)



収穫を終えた金色の棚田と初穀を飛ばすチャケサン・ナガの女性  
©the u-ra-mi-li project

※申込不要、要展示観覧券(定員350名)  
※参加券を11時から特別展示館入口にて配布します。

「みんぱく村に神楽がやってくる!」  
伊勢大神楽の実演とおはなし  
歳末のお祓いに、伊勢大神楽がみんぱくへやってきます。実演とおはなしをおして伊勢大神楽の世界を体験しましょう。

日時 12月14日(土) 13時～15時30分  
会場 特別展示館  
講師 神野知恵(本館 機関研究員)  
出演 伊勢大神楽講社 山本源太夫社中  
※申込不要、参加無料、定員200名

「飛び出す獅子舞 福めりえ」  
つくってかざって厄払い!  
日時 12月11日(土)、12日(日)  
10時～17時(受付終了16時30分)  
会場 本館1階エントランスホール  
対象 全年齢

※申込不要、参加無料、定員各日150名  
「ハンティの文様の世界」  
フェルトのコースターづくり  
西シベリアに居住するハンティの人びとは、身の回りの動物や植物、精霊などをあらわした文様で衣服や生活小物を飾ります。ハンティの文様を学んで、フェルトのコースターづくりに挑戦しましょう。

日時 1月19日(日)  
10時30分～12時、13時～14時30分  
会場 本館2階第3セミナー室  
講師 大石侑香(本館 特任助教)  
対象 小学4年生以上  
※要事前申込(先着順)、定員各回16名、参加費500円  
※受付期間 12月4日(水)から(定員に達し次第受付終了)  
※くわしくはみんぱくホームページをご覧ください。

「点字体験ワークショップ」  
目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション! 点字体験ワークショップを開催します。

日時 12月14日(土) 12時～15時30分  
会場 本館1階エントランスホール  
※申込不要、参加無料  
※みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)による催しです。

世界とつながる トーテムポールをカナダのアーティストと造ろう  
クラウドファンディングはじめました

みんぱくは、まもなく創設50周年を迎えます。これを機に、現在のトーテムポールはそのままだ、次の時代のみんなくへの象徴として、もう一本のトーテムポールを制作したいと考えました。クラウドファンディングをおとした、みなさまの温かいご支援・ご協力をお願いいたします。

期間 12月26日(水)23時まで  
目標金額 300万円

●休館日のお知らせ  
年末年始は12月28日(土)から1月4日(土)まで休館します。年始は1月5日(日)から開館します。

巡回展  
「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」」  
会期 12月22日(日)まで  
会場 横浜ユースピア文化館  
休館日 月曜日  
主催 横浜ユースピア文化館  
共催 片倉もとこ記念沙漢文化財団 国立民族学博物館 横浜市教育委員会

みんなくセミナー

日時 12月21日(土)13時30分～15時(開場13時)  
会場 特別展示館  
※申込不要、参加無料  
第498回

海の人類史  
——東南アジア・オセアニア考古学の最前線——  
講師 小野林太郎  
(本館 准教授)



トケラウ環礁での魚利用と再分配の風景

台湾から与那国島への航海実験がおこなわれるなど、海の人類史への注目は高まりつつあります。本講演では、東南アジアやオセアニアの島々を舞台に、私たち人類の海洋適応や渡海について、最新の考古学成果を交え、紹介いたします。

みんなくウィークエンド・サロン  
研究者と話をしよう  
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域/国の最新情報」「みんなくでの展示資料」について分かりやすくお話しします。

12月1日(日)14時30分～15時15分 本館ナビひろば  
みんなく展示場の中の宗教  
話者 新免光比呂(本館 准教授)

12月8日(日)14時30分～15時15分 本館ナビひろば  
「健常者」幻想をぶつ壊せ!  
——琵琶法師、イタコの触角力——  
話者 広瀬浩一郎(本館 准教授)

12月15日(日)14時30分～15時15分 本館ナビひろば  
サンタクローズとなまはげ  
——ヨーロッパの時間と季節の感覚——  
話者 宇田川妙子(本館 教授)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)  
※各イベントについてくわしくは、みんなくホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介

■信田 敏宏ほか 編  
『東南アジア文化事典』  
丸善出版 20,000円(税別)

世界に類をみない多様性を有する東南アジア。その社会や文化の成り立ちから、人びとを魅了し続ける食文化や伝統芸能、どこか懐かしさを感じる生業や暮らし、さらには、近年、関心が高まっている観光や文化遺産、そして日本との交流などを、200名以上の研究者が最新の研究成果をもとに詳しく解説する。



■川瀬 慈 編著

『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』  
新耀社 2,400円(税別)

エチオピア、カメルーン、ベナン、カーボベルデ等、アフリカにおいてフィールドワークを行う人類学者5名による小説集。小説という語り口からたちあがる芸術・映像人類学の新たな境地。



■鈴木 七美 著

『エイジングフレンドリー・コミュニティ——超高齢社会における人生最終章の暮らし方』  
新耀社 2,800円(税別)

人生の最終段階で心身面の支援が必要となったとき、誰とどこで暮らすのか。本書では、高齢者たちの希望と実践を、世界各国、日本国内で訪ね歩いた軌跡を綴った。そこには、変化の中で、多世代が人生の物語を紡ぎ、新たな異文化と出会う、いくつもの「居場所」のあり方が見いだされたのである。



友の会

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)  
※会員無料(会員証提示)、一般500円

第495回 12月7日(土)13時30分～14時40分  
「みんなく名譽教授シリーズ」  
聖なるもの 俗なるもの

講師 立川武蔵(本館 名譽教授)

第496回 2020年1月11日(土)13時30分～14時40分  
中国に生きるムスリムたち

講師 奈良雅史(本館 准教授)

中国には約1000万人のムスリムが暮らしており、その約半数を回族とよばれる人びとが占めています。彼らはおもに唐代から元代にかけて中国にやってきた外来ムスリムとイスラームに改宗した漢人との通婚を通して形成された民族集団とされており、中国全土で漢人と隣り合いながら暮らしてきました。本講演では、回族の歴史と文化について紹介したうえで、宗教教育を事例に彼らが中国共産党政権下でいかにイスラーム信仰を続けているのかを考えます。

※いずれも講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

東京講演会

会場 モンペル御徒町店4Fサロン  
(事前申込先着順・定員60名)  
※会員無料(会員証提示)、一般5000円  
第128回 2020年1月25日(土)13時30分～14時40分  
消滅の危機に瀕した言語  
講師 吉岡乾(本館 准教授)

二〇一九年は国際先住民言語年でしたが、日本ではほとんど話題になりませんでした。世界では数千もの言語が話されており、何億人も話すものも、数人しか話さないものもあります。近年、消滅の危機に瀕した言語についての意識が、少なくとも一定数の研究者間では高まっており、さまざまなアクシジョンが起こされてきています。本講演では、実際に危機言語を調査している講師とともに、改めて危機言語というものを考えます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。





想像界の生物相

# マネキンとマンドラゴラ——人形の不気味

ひとがた

やまなか ゆりこ

民博 学術資源研究開発センター 山中 由里子



資料名   マネキン
年代   1970年代後半
地域   日本

たしにはとても刺激的であった。

### ◆◆人間植物◆◆

さて、マネキンがフランス語の「マヌカン」(mannequin、服を着て客に見せるモデル)からきていることを知っている人は多いであろうが、そもそもはオランダ語(フラマン語)の「マネケン」(manneken)に由来し、man = 「人」に指小辞の ken が付いた「小さい人」という意味であった。そして近世ヨーロッパの民間信仰において「マネケン」というと、魔力をもつと信じられていたヒト型の植物、マンドラゴラ(マンドレイク)を指した。



クンストカメラのマネキン(2015年)

日本で「マネキン」というと、ディスプレイで使われる等身大の人形のこと、みんぱくにも、衣装を着た数多くのマネキンが展示されている。右の写真は、むかしの本館展示で使われていた、通称「宇宙人」(とよんでいるのはわたしだけかもしれないが……)特定の人種を想起させるような色や体形は人種差別にもつながるため、無機質な銀色の塗装がされ、地球儀の緯度経度を思わせる線が全身に施されている。展示リニューアルにもない現役は退いたが、今でも数体が収蔵庫の片隅にひっそりと立っている。

二〇一五年に訪れたサンクト・ペテルブルグ市の民族博物館クンストカメラには、逆に、肌の色やポーズ、表情までを精巧に再現した「生人形」タイプのマネキンが並んでいた。今にも動き出しそうだと気味悪がるわたしに研究員の方が、「夜に徘徊する奴もいるんだよ」と、とっておきの怖い話をしてくれた。展示マネキンはニュートラルでないといけないという不文律がしみ込んだわ



ビット・リバーズ博物館の偽マンドレイク(オックスフォード、2018年)

### ◆◆ねつ造されたマンドラゴラ◆◆

マンドラゴラは薬として珍重され、非常に高価であったため、ねつ造品も流通していたようである。十三世紀シリアの著述家アル・ジャウバリーは、ペテン師どもがマンドラゴラ(アラビア語ではヤブルフ)と称して高く売りをしているのは、じつはシクラメンの根をヒト型に彫って、再び土に埋めしばらくして掘り起こした擬きであることが暴露している。

このように自然を細工した「偽マンドラゴラ」は、驚くことに十九世紀末ごろまで呪術に使われていたようである。オックスフォード大学のピット・リバーズ博物館には、一八九〇年代にトルコやマケドニアで収集された「マンドレイクの根」が展示されている。偽物であれ、なんであれ、さまざまなお呪具と並ぶ干からびた「小さい人」は、十分に不気味であった。

※本稿は『驚異と怪異——想像界の生きものたち』に掲載されたコラムに加筆・修正したものです。

# ワヤン人形の目

民博 人類基礎理論研究部 福岡 正太

## 中国地域の文化展示 「工芸」セクション



影絵人形(白蛇伝の許仙・白娘子)(中国、H0093225ほか)

## 東南アジア展示 「芸能と娯楽」セクション



上：パロンとランダ(インドネシア、H0276315～6)  
左：影絵人形(インドネシア、H0067631ほか)



## 南アジア展示 「宗教文化 —伝統と多様性」セクション

ジャガンナート神(インド、H0173504)



観覧券売場

(本館展示場)

### 細い目の由来

ワヤンの関係者のなかには、この切れ長の目の造形が中国に由来すると考えている人たちがいる。インドネシアでは、切れ長の目をもつことが華人をはじめ、東アジアの人びとの特徴のひとつとされている。「シビット」(細い) というのはそうした形を形容することだが、インドネシアのある辞書には、「日本人は一般的に細い目をしている」という例文が載っている。おそらくこうしたイメージと結びついているのだろう。細い目の造形が何に由来するかについては、確かな証拠が残されていないわけではない。しかし、今のところ想像するしかない。しかし、中国の人形は、その影響がワヤンにおよんだ可能性もあると思わせる。中国地域の文化展示場では、漢族の影絵芝居と人形芝居の人形を見ることが出来る。『白蛇伝』の登場人物の影絵人形、『西遊記』に登場する唐僧(三蔵法師)の人形には、ワヤンの人形にもやや似た切れ長の目が描かれている。『マハーバーラタ』の物語を生み出したインドでは、あるキャラクターを切れ長の目で描く伝統はあまりないようだ。例えば、クリシュナ(クレスノ)を切れ長の目で描く例はあまり見受けられず、むしろはつちりとした目で描かれることが多い。クリシュナと同一視されているジャガンナート神の目も、大きく丸く描かれている。そんなと

ころからも、切れ長の目が中国に由来していることが想像されている。

### 見開かれた目

切れ長の目に対して、バンドウォオ五兄弟のなかでも、体が大きくて力も強く、気性が激しい次男のビモは、大きく見開いた目をもっている。彼は怪物の娘や蛇の娘とのあいだに三人の息子をもつが、そのいずれもこの大きく見開いた目を引き継いでいる。ビモと息子は、その力強さやかたい意志などにより、周りから大きな信頼をよせられている。

見開いた目は、ときに粗暴さもあらわしている。バンドウォオ家に敵対するクロウォオ家の人物の多くがこうした目をもっている。武芸に秀でるが短気なクロウォオ家の長男ドウルユドノ、傲慢でわがままな次男のドウルソノ、ずるがしこい策略でバンドウォオ家を陥れようとする叔父サンクニなどをあげることができる。

大きく見開かれた目といえば、バリ島の聖獣パロンと魔女ランダも思い浮かぶ。パロンは、悪霊がもたらす災いから人びとを守るためとされるのに対し、ランダは災いをもたらす存在として恐れられている。どちらも、大きく見開かれ飛び出した目もち、黒い瞳の周りには薄い朱色の虹彩が描かれている。その目からは、両者が大きな力を

「目は口ほどにものを言う」。これは人形にもあてはまる。人形を用いる芸能などにおいて、目の造形は、キャラクターのイメージを作るのに大きな影響を与えている。

### 切れ長の目

インドネシアの人形芝居・影絵芝居ワヤンでは、それぞれのキャラクターの性格に応じて造形の型がある。そのなかでも強く印象に残るのが目の形だろう。例えば、ジャワ島のワヤン独特の目の形のひとつに細く切れ長の目がある。こうした目で描かれるのは、比較的身分が高く、気品のあるキャラクターである。

ワヤンでは、インドに由来する長大な叙事詩『マハーバーラタ』からのエピソードがよく演じられる。いとこ同士であるバンドウォオ家の五兄弟とクロウォオ家の一〇〇兄弟は、王国の継承をめぐって戦いを繰り返り、最後は正義を重んじるバンドウォオ家が勝利を収める。このバンドウォオ家にかかわる人物の多くが切れ長の目をもっている。平和を愛し常に公正であろうとつとめる長男のユディステイロ、文武に秀でる優美な身こなして戦う三男のアルジュノ、神にもおよぶ力もち、アルジュノの盟友としてその知略でバンドウォオ家をささえるクレスノらを例にあげることができる。

宿していることが感じられる。大きく見開かれた目の表現は、世界に比較的広く見られる。何か大きな力を秘めていることを感じさせるからだろう。

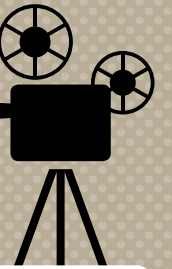
展示場を歩きながら、資料と目と目で会話してみるのは楽しい。ただし、その恐ろしい力に取り込まれないように注意する必要があるかもしれない。



影絵人形 白娘子 (H0093225)

影絵人形 ドウルユドノ (H0067669)

影絵人形 クレスノ (H0067631)



## 日本とミャンマーのはざままで

横山 廣子  
民博 名誉教授

日本での在留資格が認められず、困難を抱えるミャンマー人家族を描いた本作は、藤元明緒監督の最初の長編作品である。東京国際映画祭アジアの未来部門二冠独占をはじめとして、オランダやバンコクなどの映画祭でも受賞を重ね、国際的に高く評価されている。ミャンマーでは一九六二年から五〇年近く軍政が続き、八八年の民主化運動や僧侶らも立ち上がった二〇〇七年の反政府デモでは、大規模な反軍政活動が展開した。軍事政権下を逃れて国外に脱出する者も少なくなく、本作の家族は二〇〇七年来日した設定である。父親がミャンマーで活動に参加したことが暗示され、入国管理局の收容から仮放免になったものの、難民申請は却下されたことがわかるが、政治や法律関連の描写は少ない。対照的に丁寧に映し出されるのは、日々の暮らしのなかの家族の会話と表情である。

## ドキュメンタリー的質感

モデルになった家族がたどった時間をフィクションとして再構築した作品だが、映画を見た多くの者がドキュメンタリーのように口にする。四人家族を演じるのは、じつの親子である母と二人の息子、母子とは無関係の独身男性で、誰も演技経験はない。しかし実際のアパートの一室で撮影された映像には、「家族」

の空気が漂う。

父親役の男性はミャンマーに帰国して、撮影一カ月前に来日し、日本在住の三人とアパートの部屋や近くの公園で多くの時間を過ごし、互いの距離を縮めていったという。だが、それ以上にわたしが注目したのは、役名を演技者の本名と一致させていることだ。父親役のアイセが日本で初対面したのは七歳のカウン、三歳のテツ、彼らの母親のケインであり、カメラが回っていてもいなくても四人の名前に変化はなかった。一種、虚実ないませの感覚が醸成されたかもしれない。



家出してヤンゴンの街をさまようカウン © E.x.N K.K.

## 「僕の帰る場所」

英題：Passage of Life

2017年/日本・ミャンマー/日本語・ミャンマー語/98分

監督：藤元明緒

出演：カウン・ミヤツ・トゥ、ケイン・ミヤツ・トゥ、アイセ、テツ・ミヤツ・ナインほか

の撮影では、それはしない。事前に各人に渡しておいた台本どおりに、しかし必要に応じて監督が役の人物の心情を十二分に説明し、三歳のテツの場合は喜怒哀楽を操って撮影が進められたようだ。

それらの結果、演技未経験者でも演じているという不自然さがなく、他方、支援者ユウキの來河侑希や居酒屋店主の津田寛治も、プロ俳優

優のオーラを消してドキュメンタリー的質感にはまり込んでいる。

## 揺れる少年の心

日本での不安な生活のなか、母親はついに倒れて入院する。ミャンマーは軍政から民政に移管して情勢が変化しつつあり、彼女は帰国を決意する。日本で育ち、故郷のこともよくできないカウンと弟は、父を残し、母と一緒に帰ることになる。この映画の中心軸は、ふたつの国のはざまで生きること余儀なくされたカウンの心の揺れである。特に舞台をミャンマーに移した後のカウンの言動が絶妙に配置されていて、それが痛いほど伝わってくる。

空港での「暑い」という第一声、ミネラルウォーターを売りに来た子の眼前で閉めた車の窓、母から

促されてした祖母への拝礼、冷水のシャワー。ミャンマーならではのひとつひとつに対し、彼の心は日本へと向かい、学校のお別れ会でもらったプレゼントを眺め、日本の父との通話が途切れて床に落ちたスマホを祖母が注意すると「うるせえババア」と日本語で毒づく。故郷に戻った母は、市場で買ったロンジー（地元巻きスカート）にはきかえ、サイカー（自転車タクシー）に乗って外出し、頼にタナカ（伝統の天然化粧ベースト）を塗って談笑している。それを受け入れたくないカウンは、母のロンジーを切り裂いて隠す。

そしてとうとうカウンの心は、家出という形で爆発する。その前の母とのやりとりは秀逸である。カウンはミャンマー語の勉強を拒み、自分は日本人だと母に言い張るが、両親と同様、あなたもミャンマー人だと言いかされてしまう。「病氣治ったの？ 日本に帰ればいいのに、嘘つき」と小さい声で抵抗した後、「ママなんて、病院で死ぬばよかった」と言い放つ。リュックに大切なものを詰めて家を出て、夜まで帰宅せず、母を心配させる。

映画の最終盤では、家出後のカウンの変化の様子が描かれる。日本人学校への入学も許可され、何とかやっていくだろうと感じさせる結末である。学校へと歩いて行く母子三人の声をバックに流されるエンドロールは、この作品の英題「Passage of Life」に似合っている。本作は移民家族の物語だが、彼らの愛と葛藤を少年の心情を中心に繊細に捉えることで、形は違えど多くの家族に、また誰もが人生でたどりうる多くの経験に、当てはまる普遍性を有し、大きな魅力となっている。



家出の後、父親の実家を訪問する途上、神の宿る樹木を見上げる母子 © E.x.N K.K.

# ことばの迷い道

## 寂しさいろいろ、 惜しさいろいろ

ハン ビルナム  
韓 必南

東京外国語大学非常勤講師  
中央大学兼任講師

ふたつまたは複数の言語を照らし合わせてその類似点と相異点を研究し、それぞれの言語の特徴を明らかにしていく分野を対照言語学という。

わたしが対照言語学的に研究している日本語と朝鮮語は、敬語があり、助詞（てにをは）をもち、漢語由来の語彙もたくさんあるなど、共通点が多いということがよく知られている。しかし事物の認識の仕方、表現の仕方は言語によって各々異なるので、当然、両言語間での対応関係も一対一できれいにそろうわけではない。とりわけ形容詞となると、日本語を朝鮮語に訳そうとする際にも、またその逆の際にも、厄介な場合が少なからずある。

例えば、朝鮮語母語話者に日本語の「寂しい」は朝鮮語で何と言うかと聞くと、「ウエロプタ」と答える者が多いだろう。だからといって日本語で「寂しい」を用いる文脈で、朝鮮語では常に「ウエロプタ」を使えばいいのかというと、そうとは限らない。日本語の「寂しい」は、「独りぼっちで寂しい」「友達に会えなくなつて寂しい」「物静かで寂しい」「口が寂しい」などなど、場面によって「孤独だ」「侘しい」「うら悲しい」「切ない」「物足りない」などと置き換えられるような、多様な感情をあらわすのに用いられる形容である。

一方で、朝鮮語では「独りぼっちで寂しい」に当たる表現は「ウエロプタ」だが、「友達に会えなくなつて寂しい」なら「ソボンパダ」や「アシユイプタ」「物静かで寂しい」の場合には「チヨ

クチヨカダ」と、それぞれの場面での「寂しい」が、別の語彙であらわされる。さらに、「つきあっている人がいなくて寂しい」という文脈においては、砕けた表現として「ウエロプタ」に代わって「チュプタ」（寒い）という比喩的表現も使われる。このように日本語の「寂しい」に対する朝鮮語の対応表現は複数あるのであって、一対一の関係は成り立たない。

先ほどの「友達に会えなくなつて寂しい」の「アシユイプタ」は、日本語にするなら「惜しい」や「残念だ」におおむね相当するもので、名残惜しい気持ちや、何かが足りなくて欲しい気持ち、残念な気持ちなどをあらわすのに使われる。例えば、「金銭的に余裕がなくてお金が欲しい」ときは「トニ・アシユイプタ」（お金がアシユイプタ）と言い、「不足しているものがないため困ることはない」と言いたいときは「アシユイウン・ゲ・オプタ」（アシユイプタなものがない）、スポーツ試合などの「残念で惜しい結果」に対しては「アシユイウン・キョルガ」（アシユイプタな結果）のように使われる。一方、サッカーの試合を観戦していて、もう少しのところまでゴールを逃してしまったとき、日本語では「惜しい！」という人が多いように思うが、同じ状況において朝鮮語では、一般に「アカプタ！」と言うことが多い。「アカプタ」という朝鮮語は、「惜しい」というよりは、「もったいない」により意味合いの近そうな語である。日本語と微妙にずれていて面白い朝鮮語はまだたくさんあるが、紹介しきれないのが本当にアシユイプタ。

## 編集後記

日本語を話せる人が地球上で自分一人だけになったら……。想像するだけで身の毛もよだつが、かつてイシ（『イシ——北米最後の野生インディアン』岩波書店）が経験したような言語の消滅は、他地域でも起きていたし、黙してれば今後も起こりうる。本号の特集「先住民の言語」はこうした危機感と言語に関心を寄せる大切さを喚起する。「一言でもよいからマガール語を覚えて死のう。そしてマガール人として死んでいこう」。これはネパールの先住民マガールの民族運動家、故カバンギさんが、マガール語を失いネパール語化した同胞に向けて演説で発したことばだ。先住民にとって言語はアイデンティティの根幹にかかわるのだ。

巻頭エッセイのタイトルを見て、2CVの車体が目に浮かんだ読者はかなりの車好きだろう。大量生産の工業製品にも確かに独特の美や個性を放つものがある。メタ機能の<sup>い</sup>く言い難い美にこそ文化＝遊びが宿る、という少し大仰だろうか。その美には「しばしば万人受けしない」という修飾語も付けたくるところだが……。シトロエン2CVを目にしたら、きっと納得いただけると思う。（南真木人）

●表紙：カラーシャ語で話しかけてくるカラーシャ人の子どもたち  
 （バキスタン、ルンプール谷、2016年、吉岡乾撮影）

## 次号の予告

特集

## 「世界の縁起モノ」（仮）

## みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

### 維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

### ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もご紹介します。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
 （電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00）



## 月刊みんぱく 2019年12月号

第43巻第12号通巻第507号 2019年12月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
 電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 南真木人（編集長） 上羽陽子 齋藤晃

菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾

デザイン 宮谷一 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通ください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKUofficial>

みんぱくツイッター

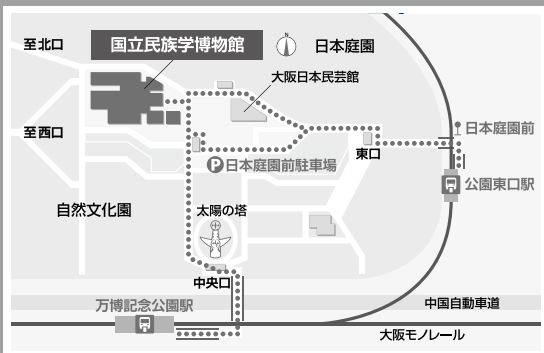
<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>



# みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

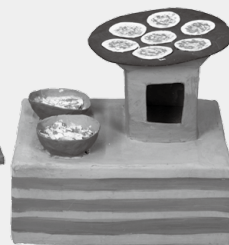
企画展のご案内

## アルテ・ポプラー ——メキシコの造形表現のいま

アルテ・ポプラーとは、特別な才能に恵まれた芸術家の作品ではなく、職人や一般の人びとによる造形表現の総称です。本企画展では、仮面や毛糸絵、陶器の資料とともに、骸骨の姿があふれる都市の街路をイメージしたコーナーや典型的なアルテ・ポプラーである生命の木など、現在のメキシコのアルテ・ポプラーの多様な姿を紹介しています。



会期：12月24日(火)まで  
場所：本館企画展示場



「ウイチョルの毛糸絵」セクション



「カフェ(街路)」セクション



「陶器」セクション

2020年国立民族学博物館  
オリジナルカレンダー

## 驚異と怪異 ——想像界の生きものたち

好評を博した特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の展示資料をもとに作られたオリジナルカレンダー。世界各地の人びとの想像のなかに息づくクリーチャーがたくさん登場します。奇妙で怪しい、不気味だけどかわいい、この世のキワにいるかもしれない不思議な生きものを、一年間とおして楽しめます！



1,320円(税込)

国立民族学博物館友の会  
会員価格 1,188円(税込)

監修：山中由里子

サイズ：25cm×25cm

仕様：オールカラー 28頁 中綴じ

◆5冊以上まとめてのご購入の場合は、  
1冊1,056円(税込)です。

◆通信販売の場合、別途送料が必要です。

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	

〈お問い合わせ〉

国立民族学博物館

ミュージアム・ショップ

水曜日定休 email: shop@senri-f.or.jp

12月中開催！友の会感謝フェア！

ミュージアム・ショップご来店の友の会会員の方は、カレンダーはじめ世界各地のグッズを店頭価格より20%オフでお買い求めいただけます。

※書籍・食品・CDなど、対象外の商品もございます。